西光寺だより

第七十六号　平成二八年十二月一日発行

●今月のことば●

今回は源信和尚でございます。今までインド・中国の高僧方でありましたがこれからのお二人は日本であります。源信和尚は平安時代に大和の当麻の里に生まれ、九歳で比叡山にのぼり天台の学僧として名声を博しました。その後横川の恵心院で念仏に心を寄せ、四四歳の時、『往生要集』を著して、広く念仏をお勧めになられました。

『往生要集』は、多くのお経の要文を集めて、仏教全体の帰するところは、結局は念仏往生の教えしかないことを体得され、往生浄土の道をまとめて撰述されたものであります。この書は、日本における最初の本格的な浄土教の教義書で、その後の浄土教の興隆に多大の影響を与えました。

和尚は、念仏者にも、執心牢固に専ら念仏を修する者と、執心不牢で他の修法の傍らにする雑修の念仏者との二種がある。一方、浄土にも報土と化土の二種があり、専修念仏者こそは報土に生まれ、雑修の念仏者は一段劣った化土に生まれる。人々は唯一の道として念仏を専修すべきであるとおすすめになりました。親鸞聖人は『教行信証』に、この報土・化土について、『往生要集』の文を引用して、

みな怠惰で慢心しており、信心が堅固でないからである。これによって知ることができた。さまざまな行を修めるものは信心が堅固でない人である。だから懈慢界（化土）に生まれるのである。他の行をまじえないでひとすじに念仏すれば、これは信心が堅固であって、間違いなく極楽浄土に生まれるであろう。

と説いておられます。

源信広開一代教・・源信和尚は広く釈尊一代の教えを学ばれて

偏帰安養勧一切・・ひとえに阿弥陀如来のお浄土を願い、一切の人々に勧められた

専雑執心判浅深・・専修念仏の信心は深く、雑修の信心は浅いと分け

報化二土正弁立・・おもむく浄土は真実の報土と、そうでない化土があるとされた

極重悪人唯称仏・・**極重の悪人**は、ただただ念仏をしなさい

我亦在彼摂取中・・我（源信和尚）もまた、阿弥陀如来の光明に摂（おさ）めとられているが

煩悩障眼雖不見・・煩悩に眼（まなこ）がさえぎられて、その光明をみることができない

大悲無倦常照我・・しかし如来の大悲は常に私を照らして下さっていると述べられた

（法蔵館正信偈もの知り帳・レッツ正信偈参考）

【解　説】

●**専雑**・・専雑は「専修」（せんじゅ）と「雑修」（ざっしゅ）のことであり、「専修」はもっぱら阿弥陀仏の本願を信じて、ただ念仏する人で、「雑修」は念仏だけでなく他の雑多な行をまじえて修める人のことなので、「専修」は他力の信心で深く、「雑修」は自力の信心で浅いと分けられました。

●**極重の悪人**・・極めて罪の重い悪人という意味ですが、煩悩だらけの凡夫とおきかえると、何とかして救ってやりたいという仏の大慈悲心を疑い、自分の思いを優先させ、本願の教えを他人事のように感じている人と受けとめることができます。後の句をみても、源信和尚自身もそうであり、私たち凡夫に自分へのこだわりから離れ、ただ素直に「南無阿弥陀仏」と念仏称すべしと、説かれています。

●**我亦在彼摂取中**
煩悩障眼雖不見
大悲無倦常照我・・この三句は『往生要集』中巻にある句。

わたしもまた阿弥陀仏の光明の中に摂め取られているけれども、煩悩がわた

しの眼さえぎって、見たてまつることができない。しかしながら、阿弥陀仏の大いなる慈悲の光明は、そのようなわたしを見捨てることなく常に照らしていてくださる。親鸞聖人はその内容を『高僧和讃』で説明しておられます。

煩悩にまなこさへられて
摂取の光明みざれども
大悲ものうきことなくて
つねにわが身をてらすなり

皆さんとお称えした宗祖讃仰作法音楽法要にも出てくる句であります。

◆十二・一月の行事◆

・十二　月　三十一日（土）
除夜の鐘
午後十一時五〇分～
西光寺本堂

・一　月　一　日（日）
元旦会法要
午前十時～
西光寺本堂

浄土真宗本願寺派　白亀山　西光寺
大阪府茨木市西河原一―七―二
電話　〇七二―六二二―四七九四
FAX　〇七二―六二二―九二九一
http://www.osaka-saikouji.net/

◆先月の報告◆

十一月二十三日（水・祝）西光寺本堂にて報恩講法要を厳修致しました。例年の恒例行事でありますが、浄土真宗にとって最も大切な親鸞聖人の御法事である報恩講法要を多くの方々とお参りさせていただきました。

御法話は本願寺派布教使の永井了祥師に来ていただき、皆さんと貴重な時間を過ごさせていただきました。

総代・役員・仏婦・ご門徒の皆様、本当にありがとうございました。

各寺院住職様とご一緒にお勤めいたしました。

御法話を皆さんで聴聞しました

カレンダーも残すところ一枚となりました。当たり前に過ぎる一日は特別な一日であるということ。その一日一日の積み重ねに一年の重さを感じます。西光寺におきましても皆様のお力添えをいただき過ごすことができましたこと、感謝申し上げます。ありがとうございました。

合　掌